

平成8年(1996年)12月1日

『21世紀塾』(第5回提言)

遅れている――歩行者の立場からの道路整備

『21世紀塾』代表世話人 小野 徹

【問題提起】

財政再建との関連から、今や国家的命題でもある「行政改革」に関連して、「これ以上のインフラ整備は、不要ではないか」という投げかけをした経済界のニューリーダーがいる。

その主な論旨は、「建設省は道路予算の使い途がなくなってしまい、道路脇に花を植えたりしている」といったものだ。

これは様々な意見があるだろうが、私はこれを聞いて、すぐ、「この人は車にばかり乗っていて、歩いたことがない人だ」と思った。

というのは、一度でも歩行者の立場になれば分かることだが、歩道もロクにないような我が国の道路は、そもそもが「危険だらけ」なのであって、どこから「もうこれ以上、道路整備への予算付けは不要だ」の言葉が出てくるのか、問い質したい気持ちだ。

――例えば、交通弱者の代表である、子供たちの通学路だ。

ビュンビュン飛ばしていく車の脇を、あたかも悪いことでもしているかのように体をすぼめて歩かなければならない子供たち。

或いは、数珠繋ぎになった車の間を、こわごわとすり抜けるように歩かなければならない子供たち。

ある場所では「歩道という名の側溝のフタの上」を、ある場所では「歩道という名の線を引いただけの通学路」を歩かなければならない子供たち。

傘をさせば道路にはみ出し、反対方向からくる歩行者とはスレ違うこともできない通学路――残念ながら、我が国の道路インフラはこの程度のレベルでしかないのだ。

戦後、車どころか農家の牛車がノロノロと行き交っていた頃、道路という道路は、歩きにくいジャリ道であったが、大勢が並んで歩ける通学路は、子供たちにとっては「楽しい語らいの道」であり、共に四季の移り変わりを学ぶ「道草の道」でもあった。

それが、これだけ西洋の文明や、文化や、考え方を取り入れ、豊かな社会になったにもかかわらず、便利さや効率性だけが重んじられて、通学路の安全さや、快適さや、楽しみといった、子供たちにとっての肝腎要めのヒューマニティー、人間性の尊重については、一向に改善の兆しが現れていない。

それどころか、前記のような暴論まで飛び出す始末で、誠に困ったことだが、いずれにしろ、人間性尊重の観点からのインフラ整備も、一朝一夕でできるものではないのだから、我々としては、時間をかけて、粘り強くこうした説明・説得を重ねていくしかないと思われる。

又、それらが現実するかどうかとは別に、私はこれからも、歩行者という弱者の立場に立ち、思いやりながら、安全運転に心掛けていきたいと、改めて心を新たにしているものである。